

飛鳥

2014年
盛夏号
第183号

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所
飛鳥出版室
発行人 永野 正将
〒780-0945 高知市本宮町65-6
電話 088-850-0588
e-mail:info@asuka-net.jp
http://www.asuka-net.jp



あかし
穏やかな眼をした土佐褐牛の「モモ」(高知県立農業高等学校)…関連記事は8ページ

南国のカラリとした暑さはどこへやら、高温多湿の日が続いています。毎日の熱中症対策をお忘れなく、ご自愛ください。

* * *

田島征彦さんの連載スタート！ 淡路島から軽妙なエッセイをお届けします。

4回にわたって連載してきた「風の人、土の人」は今号で最終回です。ありがとうございました。

「風の人、土の人」	2
おのころじま奮染記 1	4
いろいろかいろ 歯	6
文章力レベルアップ講座	7
あすへの歩跡 2	8
キルギスタンからコンニチハ	9
あすかの社窓から デラックス!	10
催し物案内板	11
わが家の太郎	12

飛鳥「かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

風の人、土の人 ④

～“高知家”を想う人たちによる知と技の融合～



土佐に根をはって生きる

HITOBITO 長崎雅代



六月八日(日) 四万十町(旧窪川町)のメタセコイアの木の下には、約三〇〇名もの人々が集まった。土佐学協会と日本名門酒会のコラボレーション企画「土佐酒を俯瞰的に捉える活動」も七年目に突入。純米酒「日土人(ひとびと)」になる永田農法酒米「山田錦」の田植え、稲刈り、酒作りまでを体験できるこの企画は、二〇〇八年の六月から始まった。一年目の田植えは一一人名の参加。途中、台風で稲刈りが中止になったこともあったが、ここ数年は、年々参加者が増えている。私が初めてこのイベントに参加した時、田植え後の交流会で酒米生産者の方が、自ら育てた酒米を使用した純米酒「日土人」を「うまい、うまい」とうれしそうに楽しそうに飲みかわす姿が忘れられない。

私事になるが、脱サラした主人と就農して十二年になる。自分で作ったものを自分達で食べる、それを共に喜んでくれる家族や仲間がいる幸せ。農業の原点であり、農の素晴らしさを確信した瞬間でもあった。

このイベントに一度参加した人のほとんどが、次の年もまた参加している。しかも、新しい友人や

知人を誘って。それは、地元の方々のおもてなしが素晴らしいからである。窪川ポークのBBQ、仁井田米のおにぎり、コロンブスの茶卵を使った卵かけご飯、しゃぶしゃぶサラダ、ローストポーク、手作りの窯で焼きあがるピザなど、ここでしか味わうことのできない旬の食材。田植えの準備だけでも大変なのに、交流会場の設営、お料理、終わった後のかたづけなど、酒米生産者の方々とその奥様方、そして滞在型市民農園「クラインガルテン四万十」に移住されている皆さんの結束力、地域上げての歓迎ぶりには、毎年感動してしまっ

訪れる「風の人」と、地元に住んでいる「土の人」が大きなメタセコイアの木の所で、一緒にになって笑い歌いながら酒を飲み、食を楽しむ、本当に素晴らしい光景である。しかし、残念ながら樹齢七十年の大きなメタセコイアの木は、この夏切られてしまう。県と国の事業で、約三十一億五〇〇万円もの整備費用をかけて次世代施設園芸団地ができる予定だそう。建設予定地がこのメタセコイアの木がある場所らしい。今回の田植えイベントが、この木の下でやる最後になるということで、地元の皆さんが約二〇〇〇個のお餅を用意してくれた。今まで毎年の田植えイベントはほとんどが雨。梅雨時なので仕方ないのだが、今年は不思議と快晴。大きな大きな木の枝を両手いっぱい広げ、集まった人々を温かく包みこんでくれたかのようだった。秋に稲刈りに来る時には、このメタセコイアの木はもうなくなっているんだと思うと、急に悲しくなり、帰り際何度も何度も振り返って手を合わせた。この連載の前回の筆者で酒米作りの生産者のひとりでもある鳩オヤジが「僕らあは、あたりまえのようにそこ

にあるメタセコイアの木の下で、季節毎に集い、頼りがいのあるオカんに抱かれていていような気持ちで思いっきり遊んできた。けれど何にも恩返しができなかった」と地元人ならではの寂しさを漏らしていた。大規模農業化を推進する国の次世代施設園芸団地事業。人間の作るものはその時の最新最先端であっても、作った瞬間から劣化していくもの。自然の作り出すものは、常に成長し続ける。樹齢七十年の二本のメタセコイアの木は、根でしっかりと手を繋ぎ、最後の時をどんな思いで



待っているのだろう。メタセコイアの木の存続や移植についてはいろいろと検討はされたようだが、残したいという地元の想いは、国や県の事業計画の中で叶わなかった。今年の夏、メタセコイアの木が切られ、この広場が無くなってもこのイベントは場所を代えて続く。この木の下で始まった、風のひとと土のひとの交流。その土地でしかない事、感じることでできない風、ありのままのものを大切に、外から訪れた人や、次世代の子どもたちに繋いでいく事ができるように、土の人の同志のネットワークを大事にしていきたいと思う。農に携わっている私達は、土に、太陽に、水に、風に助けられてなんとかやれている。

土佐学協会の目的である「土佐に生きる人、土佐に心を寄せる人に喜びや希望、活力を与える知や技を調査研究し、土佐学を創造する：」やりたい事、やらねばならない事はたくさんある。だって、風の人、土の人、高知家を想う熱い人たちは、まだまだいっぱいいますから！土佐はもともと、面白くなると思う！

(ながさき・まさよ／ファーム・ベジコ代表)

おのころじま 大奮闘記

ふんせんき

田島征彦

1. ふしぎなともだち

京都の山里から、淡路島へ引越してきて、十四年になるが、今年、ぼくは大きな荷物をおろしたような安堵感を味わっている。島を舞台にした一冊の絵本を完成させることができたからだ。

この島へ来て、信頼のできる友人ができた。小南廣之先生は元校長で、飄飄とした人物だ。まわりの人たちから、親しみを込めて「こみじい」と呼ばれている。ぼくより、二、三歳下だから、ぼくなら、さしずめ「たあじい」と呼んでもらえるかも。

こみじいは、自分の山を「冒険の森」として、子どもたちや、その親たちに遊び場を提供している。島の子どもたちは、多分誰でも、一度は冒険の森で遊んだことがあるに違いない。

三十年ほど前に出した絵本だが、ぼくは講演をする時、必ずと言って良いほど、朗読する絵本がある。『あつおのぼうけん』だ。脳性麻痺の障がいのある少年が、養護学校を抜け出して、漁師の子どもと心を通わせるという絵本である。この絵本に後押しされて、こみじいたちは障がいがあっても、みんなと一緒に学ぶ教育を、この島に根付かせたのだ。

彼は町で働いている障がいのある教え子たちのことを、愛情をこめて、ユーモラスに話される。

知的障がいのある自閉症の「かあくん」(治井一馬くん・三十歳)がメール便の配達をしている話も、面白く感動的だ。海と段々畑の美しい島の風景をバックに、彼等の仕事ぶりを、絵本にしたいと、こみじいに話すと喜んでくれた。

かあくんが働く「ひまわり作業所」の仲間たちに会うため、ぼくの住んでいる西浦から、ひと山越えて島の反対側の東浦へと出かけることが多くなった。愉快な仲間たちの懸命な仕事ぶりを見せてもらいながら、絵本の導入部をさぐった。

昼の給食をこちそうになることも度重なった。春には、近くの寺の境内で仲間たちとの花見に呼ばれたし、小旅行にまで同行させてもらった。そして、次の年の花見は、寺の本堂で盛大に催された。みんなの人気者かあくんも、大好きな英語の歌を、お父さんのギターで唄った。花見に集った人たちは、ぼくが、かあくんを主人公に絵本をつくらうと知っていることを知っている。しかし、ぼくの絵本制作は全く進んでいなかった。もう、何年も、周りの人たちを取材したり、便宜をはかつてもらいながらも、どんな絵本にするのかすら、考えが

灰谷健次郎氏が「絵描きをやめて小説家になりなさい」と絶賛した田島さんのエッセイ。キャンバスから溢れ出るような作品と同様に、本の中に収まりきれないエネルギーを感じます。連載を通して、そのエネルギーの片鱗に触れていただければ幸いです。

田島征彦
飛鳥出版室の本

ピコちゃんを
食べた。



A 5 版変型
216ページ
定価 1,600円+税

四十年暮らした京都での生き様—それは破天荒な美大

浮かんでいなかった。

自閉症という障がいについて、たくさんの本を図書館から借りて読んだ。明石洋子さんの『自閉症の息子と共に』というシリーズの『ありのままの子育て』『自立への子育て』『お仕事がんばります』（ぶどう社）の三冊が、非常に分り易いのと同時に、愛情深い子育ての記録は大きな感動だった。

かあくんの小学校の一、二年生を受けもった上田弘子先生に出会って、二年間に渡って交わされた、かあくんの母親との交換日記を貸してもらった。七〇〇日の毎日を丁寧やりとりした膨大な記録である。障害児教育の経験のない当時中年を越した上田先生の血の滲むような記録は、超多動で発達障害の小学一年生が、新しく創られる絵本の中で活躍し始めた。

すぐに、教室を脱走して、学校中に騒動を巻き起こす主人公を描くことができたとしても、自閉症への啓蒙の絵本になって、こみじいたちが、進めてきた淡路島での障がい児教育を、感動的に伝えることはできない。ここまで、たくさんの人たちを巻き込んだ絵本創りを、今更放り出すことはできるものではない。頭をかかえている時、かあくんと、保育園、小学校、中学校と一緒にだった小田陽介くんが、「かあくんの絵本」を創っているの聞き伝えて訪ねてきた。

「かあくんを、障がい児だと思っただけで。少し変な子だが、自閉症という言葉も知らなかった」

彼は、島の郵便局に勤めていて、メール便の配達をするかあくんとは、町で出会う、長いつきあいの友だちなのだ。そうなのだ。子どもたちは、障がい児という垣根なんか軽がるとび越えて、育ち合ってきたのだ。

ぼくが、絵本で言わねばならないことが、はっきり見えた。そのことをこみじいに話したら、「そこまで子どもたちは、育っていたのだ」と、自分たちの実践してきた教育に涙ぐんで感動していた。

絵本はできあがった。
かあくんのお母さんの携帯の待ち受けの絵は絵本の中の「やっくん」（かあくん）のメール便配達の絵に変わった。言葉が通じなくても、心で分かりあえる不思議などもだち同士で、郵便局のバイクとメール便配達自転車は、美しい海を見はらす道ですれ違う。



たじま・ゆきひこ

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染色図案科専攻科修了。代表作の『じごくのそうべえ』で一九七八年第一回絵本にっぽん賞受賞。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

生時代。口丹波に移って絵本制作をする傍ら、たくさんの生命に触れて過ごした日々。『じごくのそうべえ』誕生の裏話も語られています。

新編 くちたんば のんのんき



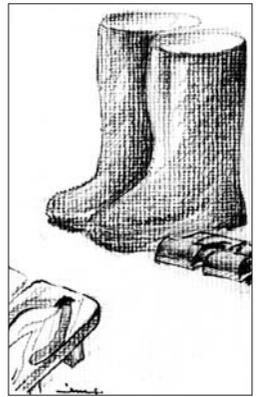
A 5 版変型
250ページ
定価 1,600円+税

野菜や家畜を育てること、障がいをもつ人たちとふれあうこと、肌に触れて感じた全てが絵本制作の糧になります。絶版になった『口丹波呑吞記』が初々しさそのままに手を入れ直して復活しました。軽妙な語り口にクスツと笑え、ホロツと泣けます。「この本は田島征彦を識ってもらうために読まれ続けて欲しい」と著者自ら語った一冊。

いそいそ
かゝる
その十四

置き引き

安藝真一



羽田発、高知行き最終便。不気味な空を見上げながら機内へ。アナウンス「台風が接近中です…出発はいたしますが…すぐにシートベルトを…」離陸するなり揺れに揺れた。静岡上空あたりは沖へ沖への横揺れ、名古屋過ぎて金属が裂ける気配に悲鳴があがる。アナウンスあつて「これより四国山脈に向います。シートベルトは更にキツくお締めを…」冷や汗が身体の上を往復している。機長の声「着陸を繰り返しましたが…安全性を考慮し…大阪空港に緊急着陸いたします…」と、なった。

ふらつく足で伊丹空港のロビーに出る。と、「あ、先輩も乗っちゃったがですか」と高校の後輩の丸い顔が笑っている。「しやない。どうです一緒に船で帰りませんか？」大阪南港 甲ノ浦 高知港という深夜船便があった頃である。「そうしよう」と私は応えて、彼の側の鞆を一つ持ってやって歩き出す。「出航まで時間あるきに、どこぞで飯食って一杯飲みましょや」と後輩は上機嫌で車に乗り込む。

たらふく食ってしたたか飲んで高知へ。ビールの酔いで泥酔。やがてエンジン音が静かになりデッキに出ると朝日きらめく手結の海岸を並走中。後輩を起こして、下船の用意をしていると、不意に、「安藝さん、その鞆どつしたか？」と彼が訊く。「えエ！この鞆、おまんのがぢやろオ」というと「違うぜツ！」と気色が変わった。反射的に私は手元の鞆のジッパーを引き開けた。中に丁寧に整理された旅道具。有難い事に持ち主の名札があった。住所も、高知市 町…後輩は「どーいて、それを持つちゅうがぜ」と睨む。答えて「空港で会った時、おまんの左側にこの鞆があつて、右側にも荷物があつたきに、一つ持つちやろうと思つて…」後輩は「僕の荷物は右側だけです！他の人の鞆に手をかけると安藝さん、そりやア、置き引き」という事になるぜエ！無言の私に「港に着いたら一緒に警察へ行きまひよ」と語尾が大阪訛りになったのが私の癪に火をつけた。岸壁に着くなり彼の制止を振り切つてタラップを走り降り、タクシーに飛び乗った。

判る。で、嫁はどこに居りましたか」と訊く。「いや、鞆があるだけで、私はお嫁さんには会つていません」と答えると、老婆は黙つて遠くを見る眼になった。平身低頭でその家を出る頃は、空はもう昼近くになっていた。

それから数日過ぎて、仕事に追われていた或る日、電話あつて出ると鞆の家の老婆だった。再び詫びの挨拶をすると老婆は「もう、それはええ。実は嫁がまだ帰らなです。心配で…もし、あなたに訊いたら何か判りやアせんかと思つて…」いや僕には判りませんが」と渋ると、一呼吸置いて老婆は云つた。「あなた！あなたが嫁を探して貰えんらうか？」目の前で火花が散つて眩暈に揺れた。「鞆は持ち帰りましたが、お嫁さんの顔も知らずに私がどうやつて探したらええやら…」と云つと、しばらくして電話が切れた。

ほんやりと受話器を持つたまま考えた。鞆を置いたままその女はどこに消えたのか。東へか西か、九州に続く道もある。いや空港の北には温泉地もある、一人なのか。誰かがいるのか。「嫁」の足取りを追うように、妄想の中を私は、さまよつていた。(あきしんいち/高知市)

文章の構造 — 単文・重文・複文



みずき わか
高知市在住。フリーライター、
生涯学習コーディネーター。
文章教室や漫画の原作教室など
高知市を中心に開催している。

水木和香

主語と述語の組み合わせが一つだけなのが、単文です。

・私は、かわいい小猫を飼っています。

主語と述語の組み合わせが複数

あっても、内容的に並列であるのが、重文です。

・私はベルシヤ猫を飼っていますが、姉は家庭菜園に夢中です。

主語と述語の組み合わせが複数あり、内容的に入れ子になっているのが、複文です。

・姉の育てた畑のアスパラガスが、収穫のシーズンを迎えました。

述語「迎えました」の主語は「アスパラガス」ですが、そのアスパラガスは姉が育てたもの、つまり

「姉」が主語で「育てた」が述語、「姉の育てた」という文章がアスパラガスを修飾しています。

【図】

姉の育てた畑のアスパラガスが、

収穫のシーズンを迎えました。

単文ばかりで書かれていると、読み易いですが単調になります。

リズムを変えるには重文も必要ですし、複雑な内容を表現する場合は複文も使います。しかし、あくまでも「ねじれ文」にならないように、気をつけてください。

TRY!

短くて分かりやすい文章にしましょう。

【問題】

日本人の習慣は複雑で、十二月から一月にかけて、クリスマス教信者でもないのにクリスマススを祝い、仏教徒でもないのに除夜の鐘を撞き、年が明けると神社へ初詣に行くという、一神教の人々にはどうにも理解し難い行動となっています。

※ポイント

出来るだけ単文にします。A↓B↓Cの関係が分かりやすいように、適宜言葉を追加します。逆に不要な修飾は省きます。

【解説例】

日本人の習慣は複雑です。十二月から一月にかけて、まずクリスマス教信者でもないのにクリスマススを祝い、次に仏教徒でもないのに除夜の鐘を撞きます。年が明けると今度は神社へ初詣に行きます。一神教の人々には理解し難い行動です。

「いきいきセカンド☆ライフ講座」
水木先生担当回

「元気になる文章講座」

に行ってきました。

六月十日、高知市文化プラザ
かるぽーとで開かれたこの講座、
参加者は五十名程。なんとその
全員が女性！ 文章を書くとい
うことに関して、女性の方が高
い関心を持っておられるとい
うことなのでしょう。

お話は、フリーライターとい
うお仕事のことから、文章を書
くことの楽しみ、ちょっとした
ポイントなど盛りだくさん。充
実の九十分でした。講座内で本
誌に関しても取り上げていただ
きました。ありがとうございます
でした!!



あすへの歩跡

2
大澤重人

鶏を頭に乗せて駄菓子屋に行くほどの動物好き。少女の夢は、獣医だった。

大学獣医学科の推薦枠のある県立高知農高に進学した。一年の家庭訪問で、担任が推薦入試の説明をすると、漁師だった父が一喝した。「高校行かしただけで十分。海女になつたらええやんか」。人生が終わったと思つた。

三年の進路相談で、担任だった下村亮二教諭(最後は県立春野高校長で退職)が高知大農学部推薦入試を勧めてくれた。「この机は、お前が赴任したときに空けておくから。教え子や獣医にしたらいいいじゃないか」。心に響く一言で、高校教諭が新たな夢となった。

大学に合格したが、学費が家から出ない。懸命に勉強し「優」をそろえ、授業料が二年間免除になった。二十四種類のアルバイトもした。奮闘

動物から学ぶ「命」「食」

県立高知農業高校教諭、農場長 萩原陽子さん(43)



はぎわら・ようこ

父の仕事の関係でフィジー生まれ。室戸市で育つ。県立高知農高の吹奏楽部、畜産クラブの顧問、陸上部の副顧問を務める。畜産クラブでは、「おやさい戦士」を結成し、女子生徒たちがイベントに出演中。【写真=付き合いの長い土佐褐牛のモモと】

の末、追加募集で教諭として採用され、一九九二年春、幸運にも母校へ赴任する。高知県内の農業高では初の女性教諭となる。指導する畜産総合科は、動物を通して命や食の大切さを学ぶ。教える自分も動物から教えられた。校内で乳牛のホルスタインを飼っている。独身のときに出産の介助を何回かした。赤ちゃん牛が乳を飲み身に寄せると、母牛は「あっち行け」とばかりに蹴る。品種改良された乳牛に、母性は見られない。

一方、肉牛の土佐褐牛(あかうし)。母子同室で、赤ちゃん牛は母牛にべつたりだ。乳を飲んでいるときに人間が近づくと、気心の知れた母牛でさえ威嚇してくる。子を守る母の強さ、愛情だ。「生むだけじゃお母さんにはならない。おっぱいを吸われてお母さんになるんだ」

結婚して二女に恵まれ、「飲むサプリ」と呼ぶ母乳で育てた置いておけば飲める粉ミルクと違って、母乳は抱っこしないとあげられない。母乳が出るなら母乳を。近い将来、親になるだろう生徒たちにも熱っぽく説く。三十代のとき、校内の豚が出

産中に死んだ。思わず体内に手を入れ、二頭の赤ちゃん豚を引き出した。心中複雑だった。「六カ月後に殺す(食べる)のに助けるの?」。自分で育てよう。自宅玄関にタオルを敷いて、粉ミルクで育てた。みるみる成長し、出荷できる体重百キロとなった。「豚カツにして食べました。のみ込むのにもいつもより時間がかったけれど」

鶏をヒナから育て、自分でさばいて、好きな料理にして食べる授業がある。愛情を持って育てたからこそ、残さずおいしく食べさせてもらう。命とは、食べるとは何かをかみしめる。これが本当の教育だという。

昨春、東京農大に進学する女子生徒に初めてあの言葉を贈った。実習助手として母校での勤務を指している。

「この机は、あなたのために空けておく」

おおざわ・しげと
毎日新聞大阪本社工程センター室長。
高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。「第二の故郷」の高知に度々帰省している。



キルギスタンからコンニチハ



うじはら なみ
高岡郡越知町生まれ/北大でロシア語を学ぶ/2001年からキルギス国立ビンケク人文大学日本語日本文学科学科長

キルギス「セクハラ」事情

氏原名美

都議会議員が「セクハラやじ」とか。件の発言は明らかに女性差別に基づくものであって、「セクハラ」というような軽々しいことばで片付けてはならない、という批判が大半のようだが、こんなヤジが女性の口から出てきそうな国がある。

キルギスでは、「セクハラ」、「ワハラ」、「※アカハラ」は、それが人権侵害であるとは認識されていないから、やってもやられても当然、問題にするほうがおかしいということになる。メディアがジェンダーの問題を取り上げることもない。結婚・出産に関して価値観が多様化するきっかけがないのだ。問題は、女性が女性の味方ではないことだ。「結婚相手もいないの?」と嘲笑い、「まだ産まれないの?」と詮索する。子どもや家事を理由に女性が欠勤する。その仕事の穴埋めは、独身か子どものいない同性の同僚の役だ。感謝のことは期待できない。それどころか、「また?」などと不平を洩らそうものなら、「結婚していないのだから、代わってくれて当然でしょ」とか「早く子どもを産めばいいのよ」などと、女性による女性への「セクハラ」がまかり通る。子育て中の女性が職場で肩身の狭い思いをする日本とは、まるで正反対だ。

ここでは、大学入学とともに就活ならぬ婚活が始まる。しかも、親や親戚、特に母親と女性親族が本人そっちのけで知人血縁のネットワークを駆使し、娘や息子の相手を探し始めるのだ。女子学生の中には親の決めたことに異も唱えず、一年生や二年生で結婚してしまうものもいる。

五月半ば、卒業を控えた学生は国家試験と卒業論文で「繁忙期」に入る。成績原簿に担当講師のサイン漏れがないかどうか確認する作業と国家試験「受験資格」認定手続きもある。さらに女子にとっては結婚を迫る母親からのプレッシャーが強くなる時期でもある。一生独りでいたい、などと言い出したら「結婚してから困らないように」と娘をしつづけてきた母親を驚愕させることになる。親戚あげての大騒ぎだ。「母と毎日けんかです」と愚痴る「進歩的」女子もいる。

スでは、独身を通するのが最大の親不孝なのだ。女性は、結婚すればいずれはかまどの陰で亭主にさえも采配を振るえるようになるが、未婚のままではいくつになっても一人前とはみなされない。むしろ厄介者扱いだ。年配の女性は、そのことを一番よく知っている。母親は、「娘の婚期が過ぎるのを黙って見ているのか」と周りから責められて、結婚を急がせるのが娘のため、己がためだと思いきんでしまう。

四年生まで順風満帆、あと一年で優等卒業というところで結婚し、成績は留年すれすれ、でもどうにか卒業証書だけは花嫁道具にして、そのまま家庭に入ったりする。しばらくぶりに会いに来てくれた学生から、「先生、日本語を忘れてしまいました」と聞くと、複雑な思いがする。しかし、「この子の世話が大変で」という嬉しそうな声と笑顔は、大変さそのものを楽しんでいる。こちら「本当によかったね」と返す。あれやこれや、他人が憶測しても始まらないのだ。彼女の幸せをうれしく思う。私の世界とは異なるけれど。

※アカハラ…アカデミックハラスメントの略。大学などの研究機関におけるパワーハラスメントのこと。

あすかの社窓から

デラックス!

～夏の日の2014～

わぬけ様

飛鳥から歩いて1分。本宮神社のわぬけ様へ有志数名で行って来ました。大人も子どもも、多くの人で賑わっていました。下半期のスタッフ一同の無病息災をお願いしました。



節電にご協力ください。

グリーンカーテンが育たないこともあって(?)、今年からより一層節電に力を入れています。電力コンサルティングの方を招いて勉強会を開き、社内の意識統一もできてきました。来社されたときに「暑い」と感じることもあるかもしれませんが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。
有効な節電アイデアがありましたらぜひご教示ください!



飛鳥菜園2014

今年の飛鳥菜園は不調です。植え付けたのが6月末。う～ん、遅すぎたのかしら。カーテンにもならない、実もならないまま夏が進んでいます。



←7月25日現在

FIFAワールドカップ2014

日本 vs ギリシャ戦のゆくえを始業前の休憩室で見守る人たち。ゴール前の競り合いに拳を握る! 声も上がる! が、結果は引き分け。4年後、この雪辱を果たす…っ!!



メダカはじめました!?

いつの間にか社屋裏の瓶の中にメダカが。しかも子メダカもどんどんふ化しているらしい…
ご希望の方おられましたらお分けいたします。



催し物案内板

〈7月～11月〉

時代を動かそうとした若者たち 「国難に殉じた郷土の志士」展

ー池田屋事件・禁門の変・野根山事件ー

と き 開催中 ～11月25日(火) ※水曜休館
9:00～17:00

ところ 安田まちなみ交流館・和
入館料 無料

ヒトと野生動物との共生

ー鳥獣被害から田畑を守るー

と き 8月2日(土)～9月15日(月・祝) ※毎週月曜休館
9:00～17:00 (入館は16:30まで)

ところ 越知町立横倉山自然の森博物館
入館料 大人500円、高校・大学生400円、小・中学生200円
20名以上の各団体は100円引き、70歳以上半額、身障者の方は無料

第38回 高知現日書展

と き 8月26日(火)～8月31日(日)

10:00～18:00 (最終日は16:00まで)

ところ 高知市文化プラザ かるぼーと7階 第1展示室

香美市立美術館開館20周年記念展

人・ひと・人 (前期) / ひろがる表現の世界 (後期)

と き (前期) 8月30日(土)～ 9月21日(日)

(後期) 11月1日(土)～12月14日(日)

9:00～17:00 (入館は16:30まで) ※毎週月曜休館

ところ 香美市立美術館

入場料 一般 310円 (20名以上団体料金 150円)

※長寿手帳提示150円、身体障害者手帳提示無料、高校生以下無料

関連企画 館長または学芸員による作品解説

【とき】会期中毎日曜日14:00～ 【ところ】展示室(※入場料要)



雑書き



◆今回のかわら版では「生き物をいただくということ」ひいては「食への感謝」について考える時間が多くなりました。萩原さんにも、田島さんにも、「風の人、土の人」の連載でお世話になった方々にも、自分が口にするもの、もっともっと近い関係になって知ることが大切なのだと教えていただいたように思います。

(上)

◆日曜日、甥っ子のハンドボールの試合の応援に。熱かった。シーソーのような点の取り合いに「よっしゃー」「ガンバレー」。それでも前半戦二点リード。後半戦始まるやいなや逆転され、残り十分。二点リードされ「ああ、もう終わった」「無理」。残り五分同点に。そして逆転勝利。熱かった試合内容。暑かった体育館。もっと熱かったのは隣の父兄の応援だった。

(中)

印刷屋さんの「すったもんだ」



この記事のタイトルである“印刷屋さんの「すったもんだ」”は私のブログのタイトルから来ております。

とは言うものの、最近はFacebookが中心になってしまい、ほとんど更新が行えておりません。年始には「ブログを再開させる！」と抱負のようなものを語らせていただき、あれから早7ヶ月…更新も片手で数えられる程度…

満を持して、この「かわら版」で更新をしていく旨を表明し、有言実行すべく頑張って参りますので、もしできてないようなことがあれば「おい！更新されてないぞね！」とご叱責いただければ幸いです。

今後とも、ブログ、かわら版の“印刷屋さんの「すったもんだ」”をよろしく願いたします。
(永野正将)

© 印刷屋さんの「すったもんだ」: <http://asukainsatsu.blog10.fc2.com>

わが家の太郎

消費税

永野 雅子

六月のある日、夏菜と小夏がやって来た。いつものように太郎を連れて散歩に出る。小夏は太郎の首輪につけた紐を身体に巻きつけて太郎に引っ張られる格好で歩く姿が可愛いやら、おかしいやら。

公園の遊具で遊んだ後の帰り道、金高堂の前で、

「おばあちゃん、本買って」と小夏、久しぶりのことだし、

「ま、いいか」と太郎を店の前の柱につないで入る。

散歩袋の中の小銭入れを夏菜に渡して

「いくらあるか数えてごらん。二人で一冊しか買えんよ」

床に小銭を並べて数えていた夏菜が

「一、〇二五円ある」

それならと、本選びになったけれど、まあ時間がかかること。「お姉ちゃん、これ欲しい」

「小夏、これにしよう」
さんざん迷った挙句、一冊の本が決まった。金額は九五〇円。

「それなら買えるね」と、レジに持って行くと、店員さんが、

「一、〇二六円いただきます」

なんと、一円足りない。消費税を計算に入れてなかった。しかも八%。

三人顔を見合わせる。小夏は泣きそうな顔。

「夏ちゃん、お金、取りに行っておいで」

夏菜は駆け出した。

待つ間、太郎はと見ると、柱につながれて、チンと座っている。「ごめんね。もうちょっと待ってね」

程なくして夏菜が息急ぎ切って駆けこんできた。



COCOARアプリをダウンロードして 太郎のお散歩を見よう!

お持ちの携帯端末で「COCOAR 2」アプリをダウンロードし、上の画像をスキャンすると画像が動きだします!
(アプリはQRコードからダウンロードできます)



iOS



Android



パンダと「2」が描かれたアイコンです!

一円を支払って、めでたく本を購入。
帰り道、夏菜曰く。

「おばあちゃん、私痩せた気がする」

太郎こそ大迷惑で、長い時間店頭の柱に繋がれて、人待ち顔にしていたけれど、人間なら文句のひとつも出るところだろうに、しっぽをふりふり帰る姿がいじらしい。そういえば七月七日は太郎の九歳の誕生日。

太郎ちゃん、好きなおやつを買ってこようかね。

(ながのまさこ／飛鳥常務取締役)